

# 太宰府の文化財

391

## 日吉神社拝殿

### 観世音寺五丁目

日吉神社は、観世音寺の北側丘陵上にあります。66段の石段を登ると、正面に拝殿があります。

拝殿は南向きに建てられ、その構造形式は、正背面三間、側面二間、入母屋造の妻入りで、屋根は昭和になつて葺き直された棧瓦葺です。柱は、角を落とした面取り角柱で、差敷居・頭貫を通し、腰長押、内法長押を打っています。

柱の上には大斗肘木をのせ、桁を受けています。拝殿を正面から見ると、上方の屋根に囲まれた三角形部分(妻飾)は、虹梁大瓶束と呼ばれる構造で、虹梁大瓶束の結締と呼ばれる部分には鬼面の彫刻があります。拝殿内部の天井を見上げると、大きな柱(大虹梁や小梁)が架けられ、その中央部分は格子状に造られた格天井となっており、そこには極彩色で猿・獅子・鳥などが描かれた天井絵が25枚はめられています。その周囲は天井を張っていないため、屋根裏が見える構造(化粧屋根裏)となっています。窓は、連子(格子)を前後に並べ開閉するという無双窓でしたが、現在内側の引き戸が失われて

しまい、連子窓となっています。拝殿に使われている木材は、全体的に樟材で、垂木には松材が使用されています。

建立年代は天井裏の大瓶束に「正徳四年ノ午ノ三月吉日」と墨書があることから、正徳4(1714)年に建立されたことがわかります。また、虹梁に彫られた絵様(若葉文など)にも、17世紀のシンプルな模様から派手な彫り込みへと移行していく18世紀前半の特徴が表れています。また、棟札や柱の墨書によると、文久2(1862)年、明治25(1892)年、同42(1909)年に修理され、昭和13(1938)年には本殿との間にあつた渡殿を、現在のように拝殿の一部のように増築しています。そして、建立から修理まですべて地元の観世音寺地区の人々によって行われたこともわかります。

この拝殿は、江戸中期の建築様式を残す市内で最も古い拝殿として、平成27年10月20日に市の有形文化財に指定され、現在も地元の氏子会により毎月1回定期清掃が行われ、大切にされています。



拝殿全景



天井部



虹梁に彫られた絵様

文化財課 宮崎 亮一

# 太宰府の文化財

392

## 墨書が残る巡方 国分二丁目



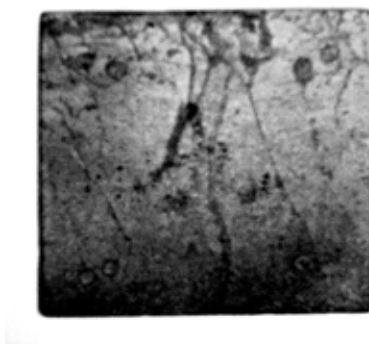
巡方 (表)



巡方 (裏)



飾具をつけた腰帯 (九州歴史資料館 提供)



巡方 (裏) 赤外線写真 (中央に「九」の文字)

この「太宰府の文化財」で以前に墨書土器「花寺」について紹介しました(平成27年9月1日号)。これが出土した井戸から一緒に腰帯を飾っていた巡方が見つかりました。今回はこの巡方について紹介しま

す。奈良時代から官人は、鍔とよばれる飾具を付けた腰帯を使用していました。この飾具には四角い形をした「巡方」や、かまぼこを輪切りにしたような形の「丸鞆」があります。飾具は養老衣服令より、朝服(公務の時の服装)は官人の位によって使用する材質や色が定められており、五位以上は金銀装腰帯、六位以下は烏油腰帯(青銅製品に黒漆が塗られたもの)の使用が決められています。

飾具は金属を加工したものが使用されていましたが、延暦15(796)年には公的には金属製の飾具が禁止され、金属製品から石製品(石帯)へと変わっていったとされています。

国分松本遺跡第14次調査で見つかった巡方は、大きさは縦3.5cm、幅4cm、厚さは0.6cmを測ります。材質は蛇紋岩と考えられ、色は淡い緑色をしています。表面と側面はツ

ルツルに磨かれているため光沢がありますが、裏面は腰帯に密着して隠れるため、磨きが行われていません。また、四隅に飾具と帯とを結ぶための穴があります。

この巡方をよく観察してみると、裏面に石の模様とは異なる黒い線がうつすらと見えます。これを赤外線照射して撮影してみると、巡方の中央に「九」という文字を確認することができました。腰帯には複数の飾具が装着されることから、九番目に配置される飾具であることを示している可能性が考えられます。

また、もしかすると、最後は飾具という役割とは異なる目的をもったものという可能性も考えられます。

この巡方は最終的には平安時代前期に埋まった井戸から出土しました。なぜ井戸から出土したのか、ほかの巡方はどこへいったのか、また、どんな身分の人物が使用していたのか多くの疑問が残ります。今回の調査では答えを導き出すことは困難ですが、調査と事例の増加に期待したいと思います。

文化財課 中村 茂央

# 太宰府の文化財

393

## 水城東門跡を通った日田街道と松並木

664年、太宰府地域防衛のため水城が築造され、東西に造られた門はその後、大宰府の出入口となりました。西門には筑紫館と大宰府をつなぐ官道（公の道路）が、東門には博多と大宰府をつなぐ官道が整備されます。東門が門としての機能を失い切通の状態となったあとも、官道とほぼ同じ位置に江戸時代には日田街道が、明治時代以降は国道、県

道、市道が整備され、人々の往来を支えてきました。今回は、江戸時代に整備された日田街道に目を向けてみたいと思います。

日田街道とは、徳川幕府の天領（幕府の直轄地）である大分県日田市に置かれた九州統治の拠点である郡代役所の永山布政所を起点に、小倉城（豊前）、中津城（豊前）、福岡城（筑前）、久留米城（筑後）、熊本城（肥

後）と岡城（豊後）、大分城（豊後）の7つの城へ向かう6つの街道の総称です。その経路には太宰府天満宮や英彦山（福岡県添田町）なども含まれ、天領と各国を結ぶ道と信仰の道の2つの用途を持つ街道として整備されました。

太宰府を通った日田街道は筑前宰府路や福岡城路などと呼ばれ、日田と太宰府天満宮、博多・福岡城を結ぶ約61kmの街道で、西鉄二日市駅の東側、鷺田川沿いを通り、通古賀を抜け、関屋に至り、参詣道として太宰府天満宮へ向かう道と水城東門跡を通り博多・福岡城へ向かう道の二手に分かれます。



大正4年～昭和初期の東門跡の様子（絵葉書）



水城館前の広場に植えたクロマツ



水城館周辺整備地の植栽配置図

天領と福岡城を結び多くの人々や物資が往来した街道沿いには、往来する人々に木陰を与え、道を風雨から守るために松が植えられ、松並木となりました。江戸時代に描かれた筑前名勝「画譜」などの絵図には東門跡を通る日田街道沿いの松並木が描かれています。この松並木は明治時代になっても数本の老松が残っていて、明治42（1909）年8月の暴風により、その中の1本の根元に亀裂が入り危険なことから、福岡県知事あてに、伐採のために払い下げを願う文書も出されています。また、大正4（1915）年から昭和初期の東門跡周辺の様子を写した絵葉書にも松並木が見え、日田街道の面影を見ることが出来ます。

現在、東門跡周辺では史跡整備が進み、土塁の復元とともに水城跡散策の休憩所となる水城館や、古代の官道を明示するなど水城跡の歴史を伝える整備を行っています。今では日田街道沿いの松並木は姿を消してしまいましたが、多くの人々が往来した道の歴史を伝えるため、整備地の一角に1本のクロマツの若木を植えています。

文化財課 沖田 正大

# 太宰府の文化財

394

## 大宰府発掘50年

3億円事件が発生し、九州大学に米軍機が墜落。学生運動や環境汚染問題が社会に暗い影を落とす中、ヒッピーやサイケデリックが若者をとりこにし、レトルトカレーが発売され、テレビではゲゲゲの鬼太郎や巨人の星が放送開始、長髪のGSが若い女性のアイドルでした。昭和43(1968)年の出来事にはフラス



昭和43(1968)年に大宰府政庁跡で始まった発掘調査の様子(写真提供 九州歴史資料館)



現在の太宰府政庁跡

トフードにアニメ、アイドルなどができます。高度成長期の真ただ中だった1968年。実はこの年に文化庁が発足しています。そしてここ太宰府において計画的な発掘調査が開始されたのもこの年でした。当時の太宰府(太宰府町)は景気増大、人口の増加にともなう住宅需

要の急増にあわせ、福岡市のベッドタウンとして四王寺山裾を中心とした複数の箇所宅地造成が開始され、開発と文化財保存の問題で大きく揺れていました。当時の文化財保護委員会は史跡保存の前提で史跡指定拡張とそれに向けた発掘調査の方針を打ち出し、学校院跡では私有地発掘反対の看板が掲げられました。そのような中、昭和43年秋に始まった大宰府政庁跡の発掘調査では、政庁跡が2度以上も建て替えられたもので、地表に見えている礎石などの下に、さらに古い時代の政庁跡があったことが知られ、南門や中門からは水晶が入った奈良時代の壺が出土し、政庁地区や蔵司周辺から古代の木簡が出土するなど、次々に画期的な成果を上げました。その成果は新聞にも大きく取り上げられ、史跡や文化財といったものがなんであるのかが地元によく理解されるようになりました。太宰府天満宮の南の石坂に建設されていた九州歴史資料館が昭和47年に開館し、いち早く大宰府から出土した遺物を展示するようになり、文化財保護への理解も一層深まりました。その後、発掘調査は九州歴史資料館が継続して行う

ようになり今に至っています。調査研究の成果は10年ごとに総括され、図書の刊行や特別展の開催などが周年行事として積み上げられてきました。

発掘10周年の時に刊行された「西都大宰府」(藤井功、亀井明徳共著、NHKブックス)のまえがきに次のような一節があります。「広く多くの人たちに調査のなまの資料と研究成果を提供し、ともに大宰府を考えていただきたいとの願いがある。多くの人に遺跡を理解してもらおうのが文化財保護の基礎であり、それは調査者の義務である」

時は50年を刻み、時代は大きく変わりましたが、その言は今も変わらず、私たちの指針となっています。

※ご紹介した図書のほか、太宰府で発掘調査が始まったところを記録した本には次のようなものもあり市民図書館で閲覧できます。「古都大宰府 保存への道」1994(財) 古都大宰府保存協会 / 「大宰府発掘 今昔物語」2009(財) 古都大宰府保存協会

文化財課 山村 信榮

# 太宰府の文化財

395

## 大宰府政庁 特別史跡大宰府跡・観世音寺四丁目

本市には、古来の文化を伝える太宰府天満宮をはじめ、史跡・文化財が数多くあり、歴史・文化の街として知られています。その礎は今から1300年以上前に誕生した「大宰府」にあります。

大宰府は、北は杵岐・対馬、南は種子島・屋久島などの南島まで、九州全体を管轄した役所で、また日本の西辺を守り、海外との外交・貿易・帰化を担う重要な役割もありました。朝廷の一つの「省」よりも多



正殿（政庁跡にて「VR大宰府アプリ」を使い撮影しました）



両脇の建物に上級官人の座席があったと考えられます（北西から）

くの役人（官人）をかかえた巨大な組織であり、長官には大臣に次ぐクラスの高官が京から赴任し、本来は京におさめる税もここに集められ財源になりました。このため「遠の朝廷」（京から遠くはなれたところにある朝廷の意味）とも呼ばれています。

その中枢は大宰府政庁で、これを取り囲むように、所・司といった多くの部署が置かれていました。

この大宰府政庁一帯では、どのようなことが行われたのでしょうか。大宰府は全体的に京の宮殿や街とよく似た構造・配置となっており、朝廷の例が参考となります。

午前三時ごろ、御笠川のほとりの朱雀門が開くと、政庁前に官人たちが集まってきました。午前六時半ごろにそれぞれの門が開き、下級の官人は、政庁周辺にあるそれぞれ担当する所・司の建物に向かいました。大宰府の長官や所・司の長らは、南門から政庁に入って正殿・脇殿の所定の場所に着座し、午前中は所・司から提出される文書の承認・決裁をしたと考えられます。これが終わると、所・司の長は政庁からそれぞれの所・司に行き、執務を行いました。そし

てまだ日が高いうちに仕事を終え、帰宅しようです。

政庁では、時々儀礼も行われ、このとき官人たちは中央の庭に位に応じて整列しました。なかでも外国の使者を迎える儀礼は特別で、政庁へ入る南の大道・朱雀大路からはじまる、街をあげての大がかりのイベントとなったことでしょう。

今年は大宰府政庁跡で発掘調査がはじまって50年になります。政庁跡では、奈良・平安時代の太宰府の姿をバーチャルリアリティ技術（VR）を使って再現し、スマートフォンで無料提供しています（政庁跡は無料Wi-Fiも使えます）。近々、ここで述べた政庁のようすを再現した新システムの公開も予定していますので、ぜひご覧ください。（詳しくは、日本遺産太宰府ホームページでもお知らせします。http://www.dazaifu-japan-heritage.jp）

文化財課 井上信正



# 太宰府の文化財

396

## 浦ノ田遺跡

### —中世墓地の様相—

浦ノ田遺跡は太宰府天満宮境内の丘陵にあった遺跡です。九州国立博物館に通じるエスカレーター設置場所に当たったため、福岡県教育委員会により発掘調査が行われました。



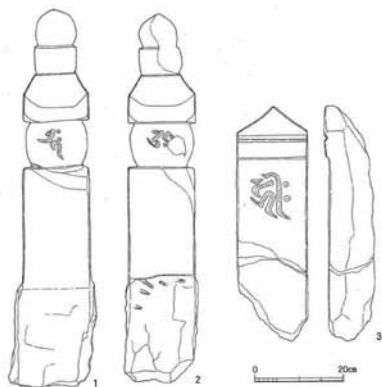
発掘当時の墓地の様子（九州歴史資料館 画像提供）

調査成果によると、丘陵の北斜面に方形石組み区画があり、20カ所

石塔群とそれに伴う穴が発見されました。この穴からは、葬送儀礼に使われたと考えられる土師器の皿（素焼きの皿）や、火葬骨を納めた蔵骨器としての古瀬戸（愛知県尾張地方



左から一石五輪塔2基と板碑1基（移築後）



一石五輪塔と板碑の実測図  
（報告書『浦ノ田Ⅳ』から引用）

の焼き物）、中国産の陶磁器、銅製の筒型容器などが見つかりました。これらの墓は、出土遺物の時期から鎌倉時代後半～室町時代（13世紀後半～14世紀）に作られたものです。蔵骨器を埋めた上には、五輪塔（密教の五大〈空・風・火・水・地〉を表している石塔）や板碑（板状の石に種字〈仏を表す文字〉や仏の像等を彫ったもの）などを建てています。五輪塔は空風輪、火輪などの個別の石材を組み合わせて作るタイプが多いのですが、この墓地で出土した五輪塔の中には一石五輪塔と呼ばれる1つの石を彫りこんで形を作るものがあり、それらは地輪（土台になる四角形の石）が縦に長いという特

徴があります。この一石五輪塔は砂岩製で2つ並んで建てられており、水輪部に彫られた種字はバク（釈迦如来）と、タラク（宝生如来）です。この遺跡がある場所は、天満宮安楽寺（現在の太宰府天満宮）の境内であり、天満宮安楽寺に関係した人々が葬られている可能性がります。中世における天満宮安楽寺の周辺景観を考えるうえで重要な遺跡であり、当時の墓制を良好に表す資料といえます。

また遺跡が立地する同じ丘陵の東600m付近には、焼けた土坑が発掘調査で多数見つかっており、ほかの事例から火葬施設と考えられています。推論になりますが、それらの焼けた土坑で茶毘に付された骨は、この浦ノ田遺跡の墓に葬られたのかもしれない。

発掘された墓地から保存状態のよい3つ石塔群を、九州国立博物館の敷地（天満宮からエスカレーターで抜けた左手側斜面）に移築・復元をしています。野外展示のためいつでも見ることが出来ます。九州国立博物館や太宰府天満宮に来られた際はぜひ訪れてみてください。

文化財課 高橋 学

# 太宰府の文化財

397

## 新指定された文化財

3月28日に行われました太宰府市文化財専門委員会の答申を受けて、4月26日付で、以下の1件が新たに太宰府市指定文化財に指定されました。

なお、平成27年に台風被害を受けた「晴明井のエノキ」については、平成29年6月30日付けで、市指定天然記念物を指定解除されました。太宰府市指定文化財は、これで合計32件となります。

◎有形文化財（1件）  
齋藤家資料

「齋藤家資料」は、齋藤家に伝わっていた、江戸時代後期に活躍した筑前を代表する絵師・齋藤秋圃（1772～1859）とその子梅圃（1816～1875）を中心とした資料で、その内容は画稿（下書き）を中心に書簡や日記など1408件におよびます。

齋藤秋圃は、京都生まれで、岡山応挙や森狙仙を師とし、上方の風俗

絵師として活躍します。その後秋月藩の御用絵師に登用され、隠居後は太宰府に居を移しています。太宰府では、齋藤秋圃に絵の手ほどきを受けた萱島鶴栖・吉嗣梅仙をはじめ、江戸後期から近現代にかけて、絵師たちが活躍しますが、齋藤秋圃が太宰府の南画（中国の南宗画に由来する画派）の創作活動の礎を築いたといえます。

1000件を超える画稿類が町絵師の家にまとまって伝わる例は、全国的にも珍しく、この資料は、江戸後期を代表する南画絵師である齋藤秋圃を研究する上で極めて貴重な資料と言えます。

文化財課



鐘馗図



寿老人図



綾部八幡宮社参図

### 『太宰府の絵師 齋藤秋圃』展

齋藤秋圃展

会期 6月2日(土)～7月16日(月祝)

月曜休館

会場 太宰府市文化ふれあい館展示室・多目的ホール

※観覧無料

本市では、齋藤家が保管されていた資料を4年かけて本格的に調査しました。今回は、調査によって明らかとなった貴重な画稿の数々を作品と共に展示しています。研究者注目の展示は、初公開の資料ばかりです。文化財に慣れ親しんだ太宰府市民にとっても、見逃せない貴重な機会です。筑前を代表する絵師のユニークな構図と伸びやかな筆使いを、ぜひご覧ください。

オープニングイベント

○開会式 ○展示解説

6月2日(土)午後1時30分～2時30分

展示特別講座

○「齋藤秋圃研究の歴史」

橋富博喜(元近畿大学教授)

6月16日(土)午後1時30分～3時30分

太宰府市文化ふれあい館1階実習室

※申込不要、受講無料

問い合わせ

文化財課(☎内線472)

# 太宰府の文化財

398

## 原遺跡第27次調査

### 山岳寺院「原山」本堂伝承地の確認調査

平成29年9月から連歌屋、三条に広がる山岳寺院「原山」の本堂伝承地で、遺跡の内容を確認する調査を行いました。

山岳寺院「原山」は天台宗の寺院で、「原八坊」とも呼ばれ、時宗を開いた一遍や室町幕府を開いた足利尊氏が滞在した記録が残されています。近世に書かれた『円満山四王寺縁起』では、宝亀5(774)年に

古代山城の大野城内に建立された四王院(寺)の別院として、天台宗の円珍の弟子が9世紀に建立したと伝えられています。

今回の調査では、2棟の建物跡と石組遺構、階段遺構、石列などを確認しました。2棟の建物跡は13世紀代に建てられたもので、柱と柱の間の数が3間×3間(東西8m×南北12m)の建

物跡1(図2、赤線の建物跡)と5間×3間(東西14.5m×南北11m)の建物跡2(礎石建物跡、図2、青線の建物跡)です。各建物跡の北側には、屋根から雨が落ちることのできる雨落溝が残っています。遺構の重なりから建物跡1から建物2へと建て替えられたと考えられます。その後、14世紀代になると建物は姿を消し、石組遺構(図2のピンク色の囲み、図3)が造られます。この石組遺構の上には昭和45年に発見された石塔(層塔)が建てられていたと考えられます。また、今回の調査地の東側において、平成27年度に確認した道から敷地内に入るための階段遺構(図2の緑色の囲み、図4)を

確認しました。石列(図2のオレンジ色の囲み)は5石が残り、建物跡よりも古い時期の基段の一部と考えられます。

確認した2棟の建物跡は、これまで原遺跡で確認した建物跡よりも規模が大きく、調査地が「本堂跡」との伝承も残ることから、原山の本院と考えられます。建物廃絶後には、この土地が本堂であったことを示す石塔(層塔)が建てられていたようです。また、階段遺構の確認により、道と本堂が一連の遺跡であることを確認しました。これらの遺構の確認は、山岳寺院「原山」の歴史を解明するうえで貴重な成果となりました。文化財課 沖田正大



図1 調査位置図(赤丸が調査地点、上が北)

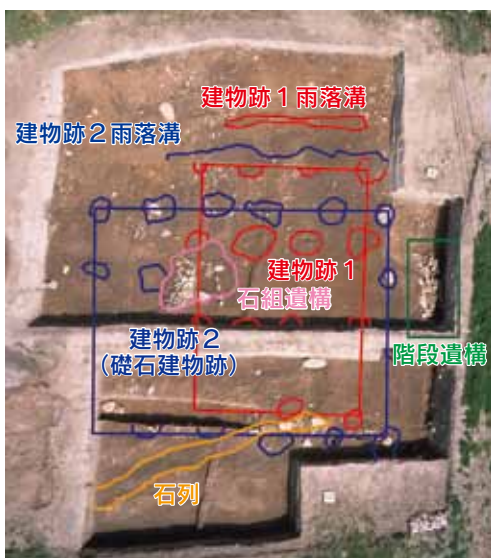


図2 調査区全景写真(上が北)



図3 石組遺構(北側から撮影)



図4 階段遺構(東側から撮影)



# 太宰府の文化財

399

## 大宰府の羅城

### 「古代の大宰府を守った外郭施設」



赤の破線が羅城の想定位置 (画像提供 九州歴史資料館)



想定される羅城の北東城 (天拝山頂より)

50年に及ぶ古代大宰府の調査研究の大きな成果の一つに、大宰府を守った大野城跡や水城跡、基肄城跡をつなぐ施設の存在が明らかになりつつあることが挙げられます。

本市の南に位置する筑紫野市の前畑遺跡は西鉄筑紫駅西側の丘陵地にあります。この土塁は基肄城方面から大宰府に向かう方向を持つことから、大宰府を取り囲む城壁の機能を持った外郭施設だった可能性が指摘されました。このような施設が存在は、考古学による大宰府研究の礎を築いた九州大学の鏡山猛の著書『北九州の古代遺跡』(1956年刊行)の中で大宰府の「羅城」と呼称され、

具体的な外郭線の位置は国立歴史民俗博物館の阿部義平の論文「日本列島における都城形成・大宰府羅城の復元を中心に」(1991年刊行)の中で紹介されました。

「羅城」は主に中国の唐代以降に使用された、都市を取り囲む城壁を示す言葉で、その用語は中国の地方都市や諸外国の都市にも使われました。日本に

おいては『日本書紀』天武8(679)年11月条に「難波に羅城を築く」とあり、古代の時点で京に係る施設としての「羅城」の用語が使われていたようです。本市と友好都市の関係にある韓国扶餘にあった百済の首都「泗泚」にも戦前から羅城があったことが知られ、羅城の遺構は現在では世界遺産「百済歴史地域」の構成資産になっています。日本での「羅城」の概念についても前畑遺跡の発見をきっかけに論議が盛んになっています。

阿部説によれば大宰府をとりまく「羅城」は総延長で約50キロメートルの規模となり、東アジアでも屈指の規模の施設となるようです。前畑遺跡の発見がきっかけとなり福岡県が主体となって関係する市町の教育委員会が参加して、大宰府の外郭施設としての土塁や関連施設を探すプロジェクトが立ち上げられ、小郡市域や本市の大野城跡内などで新たな発見がありました。本市においても地元のご協力をいただき四王寺山から宝満山、高雄地区などで「羅城」の痕跡を探す作業を続けています。

大宰府発掘50年を迎え、新たな古代大宰府の調査研究が進められています。



関係者による現地踏査 (平成29年度)

文化財課 山村 信榮

# 太宰府の文化財

400

## 大宰府政庁南門

大宰府政庁跡は、古代、西海道（今の九州）を管轄し外交の窓口なども担い、朝廷と関わりの深い役所である大宰府の中枢施設だった場所です。政庁跡を正面（南側）から向かい、石段を上がっていくと最初に目にする礎石群があります。ここが、政庁の正面玄関にあたる「南門」の跡です。

柱座が造り出された礎石が計18基、



現在の南門跡（南東から撮影）  
18本の総柱を支えた礎石のうちの12基が現存し、そのうち7基は元々の位置を保っています。



九州国立博物館4階展示室入り口前に展示されている大宰府政庁南門模型（九州国立博物館画像提供）



アプリを使って現地で見ることができるVR画像

東西方向に6基が南北に3列、整然と並んでいます。その規模は東西20・91m（桁間5間）、南北8・18m（梁間2間）で、面積を計算してみると170㎡余りと、門だけで現代の戸建住宅が1棟建てられるほどの広さです。柱と柱の間は、東西5間のうちの中央間だけが他と比べて約1・5倍広い5・7m。この部分

が南門のメインの扉が位置したところ

現在地表に見える礎石の上にはどのような建物があったのでしょうか。復原にあたっては、古代建築研究の第一線の研究者たちが関わりました。使われている礎石が巨大であることから重量のある大きな建物と想定でき、屋根が二重となる重層構造と推定されています。また屋根は、発掘調査で確認された基壇きだんの規模から、雨落ちが基壇の外側にくるような、四方に軒の出がある入母屋いりもや形式とされました。こうして、時代が近い建築物である平等院鳳凰堂などを参考に、重層の入母屋屋根の壮麗な五間三戸門（5間のうち中央3

間が出入口となる門）で復原されています。建築されていた当時としては先進的な大陸風の建物で、都とここ大宰府にしかなく、他の地方官衙（役所）とは大きく一線を画していたと言えます。この門を古代官人たちや外国からの使節などが通つたことを想像してみますと、時を越えて今もこの礎石がこの場所にあることには言い様のない感慨深さがあります。現地では※日本遺産関連アプリを使って、お持ちのスマートフォンやタブレットで大宰府政庁の往時の姿をご覧いただけます。ぜひ、西の都を体感してみてください。

※アプリは「VR 日本遺産 古代日本の「西の都」大宰府」でご検索ください。

文化財課 遠藤 茜

### 「まるごと太宰府歴史展」開催中！

今から50年前の昭和43（1968）年秋、政庁跡で入れ式が行われ、約1年をかけて特別史跡大宰府跡での最初の計画的な発掘調査が、福岡県教育委員会によって行われました（大宰府史跡第1次調査）。現在、太宰府市文化ふれあい館（国分四丁目9番11号）で開催中の「まるごと太宰府歴史展」では、旧石器時代から近現代までの太宰府の通史展示とともに、大宰府発掘50年をテーマに関連資料の展示を行っています。この機会にぜひご覧ください。（入館無料、会期は11月3日まで）